

## 中学生の教師に対する信頼感と幼少期の父親および母親への愛着との関連<sup>1)</sup>

中 井 大 介

筑波大学大学院人間総合科学研究科

庄 司 一 子

筑波大学大学院人間総合科学研究科

本研究の目的は、学校教育における教師と生徒の信頼感の重要性と、思春期における特定の他者との信頼感の重要性を踏まえ、中学生の教師に対する信頼感とその関連要因としての幼少期の父親および母親への愛着との関連を検討することであった。中学生 201 名を対象に、「生徒の教師に対する信頼感尺度」と「親への愛着尺度」を実施した。男女別に相関係数を算出した結果、男子では、両親への「安心・依存」が教師に対する信頼感と正の関連を示すこと、女子では、両親への「安心・依存」「分離不安」が教師に対する信頼感と正の関連を示すことが明らかになった。また、男女とも両親への「不信・拒否」が教師に対する信頼感と負の相関を示すことが明らかになった。本研究の結果から、生徒の教師に対する信頼感には、教師側の要因だけではなく、生徒の幼少期における両親への愛着といった生徒側の心理的な要因も関連し、その関連の様相は男女によって異なることが明らかになった。

キーワード：信頼感，教師，中学生，愛着

### 問題と目的

本研究の目的は、学校教育における教師と生徒の信頼感の重要性と、思春期における特定の他者との信頼感の重要性を踏まえ、中学生の教師に対する信頼感とその関連要因としての幼少期の父親および母親への愛着との関連を検討することである。

近年、学校教育において不登校・学級崩壊など様々な問題が発生している。その中で、授業など日常生活の中で児童生徒と直接関わる教師の重要性が改めて重視されている（大野，1997）。

教師—児童生徒関係の研究では、教師との関係

が児童生徒の学習の基盤を成し、さらに児童生徒の学級適応や人格形成にまで影響を及ぼすことがこれまでの研究で指摘されている（e.g., 飯田，2002）。

このような研究の中で、教師と児童生徒の信頼感の重要性が指摘されている。小林・仲田（1997）は児童の学級適応感について調査し、児童と信頼関係を築こうと努める教師の存在が、児童の学級適応感につながると指摘している。一方、児童生徒のメンタルヘルスの観点から、児童生徒の特定の他者との信頼感の必要性も指摘されている。酒井・菅原・眞築城・菅原・北村（2002）は、高いストレス状況に置かれた生徒が、それでも健全な学校生活を送るためには、「重要な他者」との間に信頼関係を形成していることが必要であると指摘している。

このように、信頼感とは教師—児童生徒関係や思春期の児童生徒のメンタルヘルスにおいて重要と

1) 本論文の執筆にあたりご助言いただきました先生方、並びに調査に御協力いただきました中学校の皆様へ深く感謝いたします。また、論文作成に際し大変貴重なご意見をいただいた査読者の先生方に心より御礼申し上げます。

されているが、日本においてその信頼感を扱った論文は限られている(川上, 2001)。特に、学校での教師—児童生徒関係の信頼感に焦点を当て、量的調査によって児童生徒の教師に対する信頼感の構成概念や関連要因を検討した研究は少ない。

教師の勢力資源に関する研究(浜名・天根・木山, 1983)など、従来、教師—児童生徒関係の研究とされていたものは、児童生徒の信頼感を生起させる教師の態度・行動を明らかにする研究、つまり、信頼される教師側の特性である「信頼性」についての研究が大半であった。山岸(1998)は、「信頼」に含まれる多義性が区別されていないことを指摘し、信頼と信頼以外の類似の概念を整理している。その1番目の区別として、「信頼性」と「信頼」の区別をあげ、「信頼」を「相手の信頼性の評価」、「信頼性」を「相手が信頼に値する行動をとる傾向性」としている。つまり、「信頼性」は信頼される側の特性であるのに対し、「信頼」は信頼する側の特性であり、両者は区別されるとしている。教師—児童生徒関係の重要性を踏まえれば、教師の信頼性の側面だけでなく、児童生徒の信頼感の側面からも、教師と児童生徒の関係について検討する必要があると考えられる。

信頼感については、これまでもあらゆる人間関係に影響を及ぼす変数として、協力や相互作用が必要とされるすべての社会的状況で欠かすことのできない問題として指摘されてきた(Johanson & Swap, 1982)。最近では、信頼感、人々の精神的健康を高め維持する効果や、ストレス耐性の強いパーソナリティとの関連という視点でとらえられ、その重要性が指摘されるようになってきている(天貝, 2001)。

信頼感に関する研究は、大きく分けてErikson(1959 小此木訳編 1973)を中心とする精神分析理論による基本的信頼、Rotter(1967)を中心とする社会的学習理論による対人的信頼、実験社会心理学におけるゲーム理論、の3つの方向から研究されてきている。その中で、従来の信頼感に関

する研究は、質問紙によって対人的信頼を測定するものがほとんどであった(天貝, 2001)。質問紙による信頼感の測定は、測定の対象によって「他者一般に対する信頼」、「特定の他者に対する信頼」に分類される。

しかし、信頼感については、特定の状況や関係によりその内容や程度も異なる可能性が指摘されているが(Johanson & Swap, 1982)、これまでの研究では、「他者一般に対する信頼感」を測定する尺度が比較的多いのにに対し、状況—特定型の「特定の他者に対する信頼感」を測定する尺度が少ないと指摘されている(Anderson & Dedrick, 1990)。そのため、近年の信頼感に関する研究では、医療者—患者、専門職—秘書、上司—部下など、親密な関係や特定の状況における信頼感に関する研究が行われるようになってきている(Rempel, Holmes, & Zanna, 1985)。

教師—児童生徒関係が、児童生徒の友人関係などと同様に、学校教育の1つの基盤をなし、児童生徒の学級適応などに影響を与えていることを踏まえれば、状況—特定型の児童生徒の教師に対する信頼感を詳細に検討する必要があると考えられる。

このような観点から、中井・庄司(2006)は、生徒の教師に対する信頼感を測定する、「生徒の教師に対する信頼感尺度」(以下、STT 尺度)を作成し、生徒の教師に対する信頼感が「安心感」、「不信」、「正当性」の3側面で捉えられることを量的調査によって明らかにした。しかし、生徒の教師に対する信頼感については、未だ量的な研究が少なく、生徒の教師に対する信頼感がどのような要因と関連する概念であるかなど実証的な検討を重ねる必要があると考えられる。

信頼感の関連要因については、幼少期の対人経験がその後の信頼感の形成に影響を及ぼすことが指摘されている(天貝, 2001; Erikson, 1959 小此木訳編 1973)。このような指摘の中で、特定の他者に対する信頼感に関連する理論として、

Bowlby (1969) の愛着理論が挙げられている。Erikson (1968) は、信頼感と同様に愛着が幼少期に由来し、子どもの要求に対する愛着対象の反応の質によって影響されることから、愛着は特に信頼感と結びつきが強いと指摘している。

この愛着理論においては、幼少期における特定の対象への愛着が内的作業モデルを形成し、その後の対人関係を規定すると考えられている (五十嵐・萩原, 2004)。Bowlby は愛着理論の中で、その後の養育環境や関係によって生成される愛着の個人差として内的作業モデルの概念を提唱した。そして、内的作業モデルを人生早期の愛着対象 (主に母親) との持続的な相互作用が内在化された自己及び他者に対する表象モデルであると定義した。この内的作業モデルは、愛着対象との関係における信頼感もしくは不信感から形成され、一度形成されると変化しにくく、幼児期における愛着スタイルの個人差が、その後の対人関係様式の発達の違いに影響を及ぼすとされている (e.g., 金政, 2003)。

Pistole (1993) や Mikulincer (1998) は、この愛着理論に基づき、成人の愛着スタイルと親密な関係における信頼感との関連を検討した。その結果、不安定な愛着を有する人物に比べ、安定した愛着の人物は、パートナーに対してより高いレベルの信頼感を感じており、愛着と特定の他者に対する信頼感が密接に関連していることが明らかになった。

以上のように、内的作業モデルの個人差が、特定の他者に対する信頼感と密接に結びつくことを鑑みれば、幼少期の両親への愛着が、思春期の特定の他者である教師に対する信頼感と関連する可能性が考えられる。これまで、教師と生徒の人間関係は、教師の勢力資源、教師のリーダーシップなど、教師の信頼性の側面から検討されることが多かった。しかし、このような愛着と特定の他者に対する信頼感の関連についての指摘を踏まえれば、生徒の教師に対する信頼感には、教師の信頼

性の側面だけでなく、両親への愛着といった生徒側の心理的要因も関連する可能性が考えられる。

以上のことから、本研究では、生徒の幼少期の両親への愛着と生徒の教師に対する信頼感との関連を検討する。愛着の対象については、従来の研究で母子関係に関する研究が多いのに対し、父子関係についての研究は少ないことが指摘されている (五十嵐・萩原, 2004)。しかし、近年の親子関係に関する研究の中では、父子関係が生徒の対人関係や精神的健康に影響を及ぼすことも明らかにされている (酒井他, 2002)。そこで、本研究では、幼少期の愛着の対象として母親だけではなく、父親も含め、幼少期の父親および母親への愛着と生徒の教師に対する信頼感との関連を検討する。

## 方 法

### 調査対象

首都圏 A 県の 2 つの公立中学校について、各校とも 1 クラス単位の調査を実施した。内訳は、中学 1 年生 74 名 (男子 37 名, 女子 37 名), 中学 2 年生 61 名 (男子 30 名, 女子 31 名), 中学 3 年生 66 名 (男子 31 名, 女子 35 名), 合計 201 名。

### 調査内容

① STT 尺度 生徒の教師に対する信頼感を測定するために、中井・庄司 (2006) の作成した「STT 尺度」を使用した。この STT 尺度については、内容的妥当性の検証において一致率の基準が 60% と低めであったことや、項目数が 40 項目と若干多めであったことから、実施に際しては STT 尺度を修正した 31 項目の尺度を使用した。修正にあたっては、心理学・教育学を専攻する大学院生 5 名で内容的妥当性及びワーディングに関する検討を行った。「非常にそう思う (4 点)」から「まったくそう思わない (1 点)」までの 4 件法で回答を求めた。

② 親への愛着尺度 佐藤 (1993) の作成した「親への愛着尺度」を使用した。佐藤 (1993) は、回

想法によって明らかにされた青年の幼いころの愛着に対する表象, つまり愛着歴の表象を重視し, 対人的構えとの関連について中学生, 高校生, 大学生に調査した。その結果, 中学生段階では他の年齢段階に比べ, 親への愛着歴の表象が対人的に及ぼす影響が比較的大きいことが明らかにされた。この結果を踏まえ, 五十嵐・萩原 (2004) は中学生の愛着を明らかにするには, 現時点での愛着だけではなく, 幼少期に形成された愛着に対して, 現時点でどのような印象を有しているのかを検討することも重要であることを指摘している。そこで, 本研究では, 愛着理論や五十嵐・萩原 (2004) の指摘を踏まえ, 幼少期の親への愛着による表象を重要視し, 回想法による回答を求めることとする。この尺度は, 親との関係に対する不信感や親を拒否する気持ちを表す「不信・拒否」, 親を安全基地として安心して頼る傾向を表す「安心・依存」, 親から離れることに対する不安を表す「分離不安」, の3つの下位尺度で構成され, 信頼性と妥当性が確認されている。「不信・拒否」は「親からあまり好かれていないように感じるがあった」など8項目からなる。「安心・依存」は「親は私のよい面も悪い面もわかってきていた」など6項目からなる。「分離不安」は「親がそばについていてくれないと不安だった」など4項目からなる。これら全18項目について, 「あてはまる(5点)」から「あてはまらない(1点)」までの5件法で父親と母親それぞれについて回答を求めた。各因子の内的整合性については, 「父親への不信・拒否」が  $\alpha=.81$ , 「父親への安心・依存」が  $\alpha=.73$ , 「父親への分離不安」が  $\alpha=.71$ , 「母親への不信・拒否」が  $\alpha=.81$ , 「母親への安心・依存」が  $\alpha=.76$ , 「母親への分離不安」が  $\alpha=.70$  であった。

#### 調査時期および実施方法

調査の実施時期は2005年6月~7月。調査の手続きは, 調査対象者の在籍する学級単位で授業時間などを用いて集団で実施された。

## 結 果

### 1. STT 尺度の検討

まず, STT 尺度の因子構造を検討するために, 各調査項目について項目分析を行った。天井効果・フロア効果を検討するため, 平均値が1.5以下または3.5以上, 標準偏差の極端に小さいもの, 標準偏差の極端に大きいもの, 頻度に偏りのあるものを検討したところ, 偏りのある項目は認められなかった。次に, パラフレーズの問題を確認するために(鋤柄, 2002), 総項目間相関を算出したところ  $r=.90$  以上の相関は認められなかった。以上, 項目分析の結果から問題のある項目は認められなかった。

よって, 全31項目について, スクリーン基準に基づく因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。その結果, 初期解における固有値の減衰状況と解釈可能性から最終的に3因子が抽出された(Table 1)。第1因子は, 「私が不安なとき, 先生に話を聞いてもらおうと安心する」, 「先生にならいつでも相談ができると感じる」など11項目からなる。第1因子には「教師がいることによる安心感」に関する項目と「教師との関係性に対する安心感」に関する項目が含まれていると考えられる。よって第1因子を「安心感」と命名した。第2因子は, 「先生は自分の考えを押し付けてくると思う」など10項目からなる。これらの項目は, 教師に対する不信に関する項目であると考えられる。よって, 第2因子を「不信」と命名した。第3因子は, 「先生は教師としてたくさんの知識を持っていると思う」など10項目からなる。これらは生徒が教職という職業についている教師に対して期待する, 教師としての役割に関わる項目が含まれていると考えられる。よって第3因子を「正当性」と命名した。因子分析の結果得られたこれらの3因子は, 中井・庄司(2006)の結果と一致するものであった。各因子の内的整合性については, 「安心感」が  $\alpha=.91$ , 「不信」が  $\alpha=.91$ , 「正当性」が

**Table 1** STT 尺度の因子分析結果（プロマックス回転後）と因子間相関

項目	F1	F2	F3
<b>第1因子 安心感 (<math>\alpha=.91</math>)</b>			
先生にならいつでも相談ができると感じる	.87	-.12	-.19
先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる	.87	.08	.00
将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になる	.82	.04	-.16
私が不安なとき、先生に話を聞いてもらおうと安心する	.79	-.02	-.11
私は先生と話すと気持ちが楽になることがある	.77	.04	.07
先生はいつも私のことを気にかけてくれると思う	.56	-.07	.13
私が悩んでいるとき、先生が私を支えてくれていると感じる	.52	.06	.24
先生は私を大事にしてくれていると感じる	.49	-.03	.21
先生は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う	.42	-.01	.28
先生なら私との約束や秘密を守ってくれると思う	.39	-.19	.20
私が失敗したとき、先生なら私の失敗をかばってくれると思う	.36	.03	.35
<b>第2因子 不信 (<math>\alpha=.91</math>)</b>			
たとえ間違っているときでも、先生は自分の間違いを認めないと思う	.16	.88	-.05
先生は自分の機嫌で態度が変わると思う	.04	.82	.10
先生の考え方は否定的だと思う	-.03	.80	.14
先生の性格には裏表があるように感じる	.02	.76	-.05
先生は他の生徒と私を比べていると感じる	-.12	.73	.10
先生は自分の考えを押し付けてくると思う	-.02	.72	.12
先生は言っていることと、やっていることに矛盾があると思う	-.08	.67	.04
先生は一度言ったことを、ころころ変えると感じる	.04	.66	-.02
先生は一部の人を、ひいきしていると思う	.00	.64	-.14
先生は威張っているように感じる	-.06	.57	-.16
<b>第3因子 正当性 (<math>\alpha=.86</math>)</b>			
先生は自信を持って指導を行っているように感じる	.15	-.03	.76
先生は正直であると思う	-.06	-.02	.74
先生は悪いことは悪いとはっきり言うと思う	.00	-.08	.68
先生は決まりを守ると思う	-.26	-.09	.66
先生は教師としてたくさんの知識を持っていると思う	.01	.03	.64
先生には正義感が感じられる	-.08	.11	.63
先生は質問したことにはきちんと答えてくれる	-.03	.06	.61
先生には教育者としての威厳があると思う	.08	-.08	.59
私が間違っているときは、先生ならきちんと叱ると思う	.22	.20	.35
先生は何事にも一生懸命であると思う	-.16	.24	.35
累積寄与率 (%)	38.58	48.44	54.23
因子間相関	F1	—	-.51
	F2	—	-.62
	F3	—	—

注. 枠内は因子負荷量の絶対値が .35 以上。

$\alpha=.86$  であった。

## 2. 各尺度の基本統計量と学年差・性差

各尺度の基本統計量と学年差・性差を算出した (Table 2)。学年 (1 年生・2 年生・3 年生) と性 (男子・女子) を要因とする 2 要因分散分析を

行った結果、「STT 尺度」については、「安心感」で、学年の主効果が認められ ( $F(2, 190)=8.99, p<.001$ )、Tukey 法による多重比較の結果、1 年生が 3 年生より、2 年生が 3 年生より有意に高い得点を示していた。「不信」では、学年の主効果が認

Table 2 各尺度の基本統計量及び学年差・性差

	男子			女子			主効果		交互作用	多重比較
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	学年	性別		
	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>F</i> 値	<i>F</i> 値	<i>F</i> 値	
<b>【STT 尺度】</b>										
安心感	2.64 (.53)	2.46 (.65)	2.29 (.48)	2.60 (.59)	2.48 (.64)	2.13 (.52)	8.99***	.54	.39	1>3, 2>3
不信	2.12 (.61)	2.23 (.58)	2.68 (.69)	2.24 (.76)	2.29 (.81)	2.70 (.55)	10.41***	.49	.10	3>1, 3>2
正当性	3.26 (.54)	3.01 (.47)	2.73 (.40)	3.09 (.59)	2.94 (.56)	2.59 (.50)	16.61***	2.83	.13	1>3, 2>3
<b>【父親への愛着】</b>										
安心・依存	3.02 (.92)	2.60 (.91)	2.82 (.61)	2.99 (.94)	2.98 (.98)	2.86 (.92)	.99	.97	.93	
不信・拒否	2.37 (.87)	2.46 (.84)	2.41 (.53)	2.41 (.99)	2.32 (.84)	2.56 (.99)	.23	.01	.40	
分離不安	2.17 (.91)	1.86 (.67)	2.27 (.79)	2.27 (.90)	2.21 (.80)	1.95 (.73)	.82	.16	2.53	
<b>【母親への愛着】</b>										
安心・依存	3.23 (.93)	2.69 (.90)	2.90 (.68)	3.66 (.91)	3.42 (.99)	3.36 (.93)	3.37*	16.60***	.50	
不信・拒否	2.39 (.83)	2.36 (.82)	2.25 (.52)	2.13 (.92)	2.30 (.95)	2.42 (.98)	.14	.17	1.02	
分離不安	2.18 (.89)	1.80 (.66)	2.25 (.82)	2.52 (.93)	2.42 (.89)	2.13 (.82)	1.32	5.17*	2.96	

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$ 

められ ( $F(2, 189) = 10.41, p < .001$ ), Tukey 法による多重比較の結果, 3年生が1年生より, 3年生が2年生より有意に高い得点を示していた。「正当性」では, 学年の主効果が認められ ( $F(2, 183) = 16.61, p < .001$ ), Tukey 法による多重比較の結果, 1年生が3年生より, 2年生が3年生より有意に高い得点を示していた。

「親への愛着尺度」については, 「父親への安心・依存」「父親への不信・拒否」「父親への分離不安」で, 有意な主効果は認められなかった。「母親への安心・依存」では, 学年の主効果と性の主効果が認められた。学年の主効果では, 主効果が認められたものの, Tukey 法による多重比較の結果, 有意な学年差は認められなかった ( $F(2, 187) = 3.37, p < .05$ )。性の主効果では, 女子が男子よりも有意に高い得点を示していた ( $F(1, 187) = 16.60, p < .001$ )。「母親への不信・拒否」では有意な主効果が認められなかった。「母親への分離不安」では, 性の主効果が認められ ( $F(1, 187) = 5.17, p < .05$ ), 女子が男子よりも有意に高い得点を示していた。

### 3. 生徒の教師に対する信頼感と親への愛着との関連

「STT 尺度」と「親への愛着尺度」との関連を検討するために, 性別に相関係数を算出した (Table 3)。その結果, 男子では「安心感」と「父親への安心・依存」「母親への安心・依存」との間に弱い正の相関, 「父親への不信・拒否」「母親への不信・拒否」との間に弱い負の相関, 「正当性」と「父親への安心・依存」「母親への安心・依存」との間に弱い正の相関が認められた。女子では, 「安心感」と「父親への安心・依存」「父親への分離不安」「母親への安心・依存」「母親への分離不安」との間に弱い正の相関, 「不信」と「父親への不信・拒否」「母親への不信・拒否」との間に弱い正の相関, 「正当性」と「母親への安心・依存」「母親への分離不安」との間に弱い正の相関, 「父親への不信・拒否」「母親への不信・拒否」との間に弱い負の相関が認められた。

### 4. 生徒の教師に対する信頼感と幼少期の父親および母親への愛着型との関連

「STT 尺度」と幼少期の父母への愛着型との関連を検討した。愛着型の分類は, 五十嵐・萩原

**Table 3** STT 尺度と親への愛着尺度の相関係数（男女別）

男子						
	父親への愛着			母親への愛着		
	安心・依存	不信・拒否	分離不安	安心・依存	不信・拒否	分離不安
<b>【STT 尺度】</b>						
安心感	.39**	-.25*	-.02	.38**	-.25*	.05
不信	-.14	.18	.21	-.19	.12	.16
正当性	.28**	-.20	-.05	.33**	-.15	.02
女子						
	安心・依存	不信・拒否	分離不安	安心・依存	不信・拒否	分離不安
<b>【STT 尺度】</b>						
安心感	.23*	-.10	.30**	.29**	-.18	.29**
不信	-.20	.22*	.06	-.15	.29**	-.11
正当性	.19	-.22*	.19	.29**	-.32**	.24*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

(2004) の分類法にならい以下の方法で行った。まず、1つの下位尺度得点－（残りの2つの下位尺度得点の和/2） $> 0$ であれば、ある下位尺度得点が残りの下位尺度得点よりも個人内で優位であり、その愛着型を有しているとした。さらに、複数の下位尺度得点が優位である場合、それらの混合型の型を有していると考えて抽出した。以上の基準で分類を行った結果、「分離不安」のみが優位である者、「不信・拒否」と「分離不安」がいずれも優位である者は少なかったため、分析からは除外することとした。また、「安心・依存」と「不信・拒否」のいずれも優位な者は、親に対する両価的な愛着を有している者であると考えられるため、「アンビバレント型」と命名し、「安心・依存」と「分離不安」のいずれもが優位な者は、親との一体感を伴う愛着関係を形成していたと考えられるため、「密着型」と命名した。これらの愛着型による STT 尺度の差を検討するために、男女別、父母別に愛着型を要因とする 1 要因分散分析を行った (Table 4)。

その結果、「父親への愛着型」では、男子において、「安心感」で愛着型の主効果が認められ ( $F(1, 71) = 4.22, p < .01$ )、Tukey 法による多重比較の

結果、「安心優位型」が「不信優位型」「アンビバレント型」より有意に高い得点を示していた。「正当性」では、愛着型の主効果が認められ ( $F(1, 68) = 3.00, p < .05$ )、Tukey 法による多重比較の結果、「安心優位型」が「不信優位型」より有意に高い得点を示していた。女子においては、「不信」で愛着型の主効果が認められ ( $F(1, 80) = 3.10, p < .05$ )、Tukey 法による多重比較の結果、「不信優位型」が「安心優位型」より有意に高い得点を示していた。

一方、「母親への愛着型」では、男子において、「安心感」で愛着型の主効果が認められ ( $F(1, 76) = 3.37, p < .05$ )、Tukey 法による多重比較の結果、「安心優位型」が「不信優位型」より有意に高い得点を示していた。女子においては、「安心感」で愛着型の主効果が認められ ( $F(1, 84) = 3.25, p < .05$ )、Tukey 法による多重比較の結果、「密着型」が「不信優位型」より有意に高い得点を示していた。「不信」では、愛着型の主効果が認められ ( $F(1, 83) = 3.49, p < .05$ )、Tukey 法による多重比較の結果、「不信優位型」が「密着型」より有意に高い得点を示していた。「正当性」では、愛着型の主効果が認められ ( $F(1, 80) = 6.30, p < .01$ )、

Table 4 父親および母親への愛着型による STT 尺度得点の差

父親への愛着型						
男子	A 安心優位 n=29 M (SD)	B 不信優位 n=18 M (SD)	C アンビバレント n=17 M (SD)	D 密着 n=9 M (SD)	F 値	多重比較
<b>【STT 尺度】</b>						
安心感	2.80 (.52)	2.29 (.63)	2.33 (.51)	2.49 (.50)	4.22**	A>B, A>C
不信	2.06 (.60)	2.41 (.81)	2.32 (.53)	2.48 (.56)	1.65	
正当性	3.26 (.41)	2.84 (.55)	2.91 (.69)	2.94 (.44)	3.00*	A>B
父親への愛着型						
女子	A 安心優位 n=34 M (SD)	B 不信優位 n=20 M (SD)	C アンビバレント n=14 M (SD)	D 密着 n=15 M (SD)	F 値	多重比較
<b>【STT 尺度】</b>						
安心感	2.50 (.64)	2.22 (.67)	2.39 (.59)	2.59 (.55)	1.21	
不信	2.15 (.71)	2.78 (.79)	2.40 (.61)	2.48 (.76)	3.10*	B>A
正当性	2.86 (.61)	2.62 (.61)	2.91 (.60)	3.16 (.43)	2.25	
母親への愛着型						
男子	A 安心優位 n=34 M (SD)	B 不信優位 n=14 M (SD)	C アンビバレント n=21 M (SD)	D 密着 n=9 M (SD)	F 値	多重比較
<b>【STT 尺度】</b>						
安心感	2.66 (.53)	2.17 (.66)	2.40 (.55)	2.74 (.52)	3.37*	A>B
不信	2.08 (.55)	2.35 (.69)	2.36 (.65)	2.40 (.64)	1.29	
正当性	3.16 (.41)	2.77 (.51)	2.98 (.70)	3.16 (.58)	1.90	
母親への愛着型						
女子	A 安心優位 n=45 M (SD)	B 不信優位 n=14 M (SD)	C アンビバレント n=8 M (SD)	D 密着 n=20 M (SD)	F 値	多重比較
<b>【STT 尺度】</b>						
安心感	2.44 (.61)	2.13 (.65)	2.07 (.52)	2.70 (.60)	3.25*	D>B
不信	2.41 (.73)	2.87 (.65)	2.47 (.50)	2.03 (.85)	3.49*	B>D
正当性	2.89 (.58)	2.52 (.60)	2.46 (.58)	3.26 (.41)	6.30**	D>B, D>C

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$ 

Tukey 法による多重比較の結果、「密着型」が「不信優位型」「アンビバレント型」より有意に高い得点を示していた。

## 考 察

本研究では、中学生の教師に対する信頼感と中学生がとらえている回想法による幼少期の父親お



よび母親への愛着との関連を検討した。

まず、「STT 尺度」と「親への愛着尺度」の基本統計量と学年差・性差を算出した。その結果、「STT 尺度」では、「安心感」「不信」「正当性」において学年の主効果が認められ、1年生は3年生に比べ「安心感」「正当性」の得点が有意に高く、「不信」の得点が有意に低かった。また、2年生は3年生に比べ「正当性」の得点が有意に高く、「不信」の得点が有意に低かった。1年生と2年生が3年生に比べ「安心感」「正当性」の得点が高く、「不信」の得点が低い傾向を示すこの結果は、中井・庄司(2006)の結果とほぼ一致するものであった。一方、回想法による幼少期の親への愛着では、「母親への安心・依存」「母親への分離不安」において性の主効果が認められた。女子が男子に比べて「母親への安心・依存」「母親への分離不安」の得点が有意に高いこの結果、五十嵐・萩原(2004)の結果と一致するものであった。

第2に、「STT 尺度」と「親への愛着尺度」の相関係数を性別に算出した。その結果、まず、「父親への安心・依存」「母親への安心・依存」は、男子では「安心感」「正当性」と正の相関を示すこと、女子では「父親への安心・依存」が「安心感」と正の関連、「母親への安心・依存」が「安心感」「正当性」と正の相関を示すことが明らかになった。この結果から、男女とも幼少期の両親への愛着における「安心・依存」が、教師に対する信頼感とポジティブな関連を示すことが明らかになった。「安心・依存」は、親を安全基地として安心して頼る傾向を表すものであることから、父母双方に対するこのような安定した愛着が生徒の教師に対する信頼感と正の関連を示したと推測される。詫摩・戸田(1988)は、安定型の愛着傾向を示す者は、対人関係スキルや、相手との関係における信頼感が高いことを明らかにしている。本研究の結果は、このような詫摩・戸田(1988)の指摘を支持するものと考えられる。

次に、「父親への不信・拒否」「母親への不信・

拒否」は、男子では「安心感」と負の相関を示すこと、女子では「不信」と正の相関、「正当性」と負の相関を示すことが明らかになった。この結果から、男女とも幼少期の両親への愛着における「不信・拒否」が、教師に対する信頼感とネガティブな関連を示すことが明らかになった。「不信・拒否」は、親との関係に対する不信感や親を拒否する気持ちを表すものであることから、両親へのこのようなネガティブな気持ちが教師に対する信頼感と負の関連を示したと推測される。金政(2003)は、回避型の愛着傾向を有する者は、他者と親密になることを不快と感じやすく、社交性が乏しい傾向にあることを指摘している。また、詫摩・戸田(1988)も、回避型の愛着傾向を有する者は人嫌いの傾向が強いことを指摘している。これらの指摘は、本研究の結果とも一致するものであると考えられる。思春期が信頼感の再獲得の時期であるとする指摘(天貝, 2001)や、思春期の他者との関係性がアイデンティティ形成に影響を及ぼすという指摘(杉村, 1998)を鑑みれば、幼少期において安定した愛着を獲得していない場合、友人や保護者とともに、思春期の「特定の他者」の一人になりうる教師との間に信頼感を構築することが、生徒の対人関係の発達に寄与すると考えられる。

さらに、女子でのみ、「父親への分離不安」が「安心感」と正の相関、「母親への分離不安」が「安心感」「正当性」と正の相関を示していることが明らかになった。このことから、女子においては両親への「分離不安」が、教師に対する信頼感とポジティブな関連を示すことが明らかになった。両親への「分離不安」は、親から離れることに対する不安を表すことから、両親に対するこのような不安な気持ちが教師に対する信頼感と正の関連を示したと推測される。これは、女子でのみ見られる傾向であり、幼少期の愛着において両親への「分離不安」が高い場合、補償的に教師に対して「安心感」を求めている可能性が示唆された。詫

摩・戸田(1988)は、アンビバレント型の愛着を有する者は、過度の親和性と相手との関係に対する不安感の強さを示すことを指摘しており、このような指摘が本研究の結果に関連すると考えられる。また、五十嵐・萩原(2004)は、中学生の女子において、母親への安心感の不足や拒否感の増大といった要因への対処として、養護教諭やスクール・カウンセラーなどとの安定した関係性の構築を必要とする可能性を指摘している。このような指摘を踏まえれば、女子の両親への「分離不安」が高い場合、教師が生徒と安定した関係性を構築することによって、生徒のメンタルヘルスの維持につながると推測される。

また、生徒の教師に対する信頼感と親への愛着との相関では、女子の母親との愛着において最も有意な相関が多いことが明らかになった。従来から、母親は女子にとって一貫して重要な依存行動の向けられる対象であることが指摘されている(高橋, 1970)。天野(2003)は小学1年生から6年生の児童を対象に、母親への依存の程度を調べる調査を行い、小学1年生の段階からすでに女子は男子よりも母親に対する「甘え・依存」が強いことを明らかにしている。また、岡本・上地(1999)は、女子は母親との心理的に密着した関係を維持しつつ成長の過程を歩むことを指摘している。このような指摘から、女子にとって重要な依存対象である「母親への分離不安」が高い場合、補償的に教師に対して「安心感」を求めている可能性が推測される。また、女子にとって重要な依存対象である「母親への不信・拒否」が、女子の教師との対人関係にも負の影響を及ぼしている可能性も推測される。

このように、両親への愛着と生徒の教師に対する信頼感は、父親・母親への愛着の種類、生徒の性別の違いによって異なる関連を示すことが明らかになった。そこで、この点を踏まえ、両親への愛着型の違いと生徒の教師に対する信頼感との関連についても検討した。両親への愛着型による

「STT尺度」得点の差を検討した結果、まず、男子では、父親への愛着型における「安心感」「正当性」、母親への愛着型における「安心感」で、「安心優位型」が「不信優位型」よりも有意に得点が高かった。この結果から、両親に対する愛着で、安心感が優位である男子生徒は、不信感が優位である男子生徒に比べ、「安心感」「正当性」といった教師に対する信頼感のポジティブな側面の得点が高く、教師との関係が良好である可能性が示唆された。

一方、女子では母親への愛着型における「安心感」で、「密着型」が「不信優位型」よりも、母親への愛着型における「正当性」で、「密着型」が「不信優位型」「アンビバレント型」よりも有意に得点が高かった。また、女子では、父親への愛着型における「不信」で、「不信優位型」が「安心優位型」よりも、母親への愛着型における「不信」で、「不信優位型」が「密着型」よりも有意に得点が高かった。これらの結果から、母親に対する愛着で、「密着型」である女子生徒は、母親に対する愛着で不信感が優位である女子生徒に比べ、「安心感」「正当性」といった教師に対する信頼感のポジティブな側面の得点が高く、教師との関係が良好である可能性が示唆された。また、父親への愛着では、「不信優位型」である女子生徒は「安心優位型」である女子生徒よりも、母親に対する愛着では、「不信優位型」である女子生徒は「密着型」である女子生徒に比べ、教師に対する不信感の得点が高く、教師との関係があまり良好でない可能性が示唆された。これらの結果から、男子と女子では両親に対する愛着型の違いによって、教師に対する信頼感が異なることが明らかになった。

以上、生徒の教師に対する信頼感と幼少期の両親への愛着を検討してきたが、概して男女とも幼少期に両親に対する安定した愛着を感じられたことが、教師に対する信頼感と正の関連、幼少期に両親に対する拒否的な愛着を感じていたことが、

教師に対する信頼感と負の相関を示すことが明らかになった。また、女子においては、「母親への分離不安」「父親への分離不安」が生徒の教師に対する信頼感と正の関連を示すことが明らかになった。これらのことから、幼少期の両親への愛着が、生徒の教師に対する信頼感と関連しており、その関連の様相は男女によって異なることが明らかになった。既述のように、これまで教師—児童生徒関係は、教師の信頼性の側面から論じられることが多かった。しかし、本研究の結果から、生徒の教師に対する信頼感には、幼少期の両親に対する愛着といった生徒の心理的な要因も関連していることが明らかになった。したがって、教師と児童生徒の信頼関係をより理解するためには、教師の信頼性の側面だけではなく、今後、このような生徒側の心理的要因も含めて検討していく必要があると考えられる。

また、本研究の今後の課題として、以下の3点が挙げられる。第1に、生徒の教師に対する信頼感の関連要因については、教師の指導態度・指導行動など、本研究で取り上げた以外の教師側の「信頼性」の要因も関連することを踏まえておく必要がある。そのため、今後はさらに関連する要因の検討を行う必要があると考えられる。

第2に、本研究の結果では性差が認められ、性別によって、親への愛着と生徒の教師に対する信頼感との関連が異なる可能性が示唆された。この結果を踏まえ、今後は、生徒が信頼を抱く対象である教師の性別も考慮して、この性別による差異をより詳細に検討する必要があると考えられる。

第3に、STT尺度については本研究においても学年の主効果が認められた。中井・庄司(2006)においてもSTT尺度に学年の差異が見られたことから、思春期においては教師に対する信頼感に変容しており、発達の要因に規定されている可能性も示唆される。そのため、今後はこの学年によるSTT尺度得点の差異も含めて関連要因を検討する必要があると考えられる。

## 引用文献

- 天貝由美子 (2001). 信頼感の発達心理学——思春期から老年期に至るまで—— 新曜社
- 天野敏光 (2003). 児童期の母子間における依存 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 348.
- Anderson, L. A., & Dedrick, R. F. (1990). Development of the trust in physicians scale: A measure to assess interpersonal trust in patient-physician relationships. *Psychological Reports*, **67**, 1091–1100.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. New York: Basic Books.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. Selected Papers of E. H. Erikson. New York: International Universities Press.
- (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) (1973). 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.
- 浜名外喜男・天根哲治・木山博文 (1983). 教師の勢力資源とその影響度に関する教師と児童の認知 教育心理学研究, **31**, 220–228.
- 五十嵐哲也・萩原久子 (2004). 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, **52**, 264–276.
- 飯田 都 (2002). 教師の要請が児童の学級適応感に与える影響——児童個々の認知様式に着目して—— 教育心理学研究, **50**, 367–376.
- Johnson, G. C., & Swap, W. C. (1982). Measurement of specific interpersonal trust: Construction and validation of a scale to assess trust in a specific other. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 1306–1317.
- 金政祐司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望——現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは—— 対人社会心理学研究, **3**, 73–84.
- 川上華代 (2001). 青年期の信頼感と対人関係認知に関する一考察 関西福祉大学研究紀要, **3**, 103–115.
- 小林正幸・仲田洋子 (1997). 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響力に関する研究——学級の雰囲気に応じて教師はどうすればよいのか—— カウンセリング研究, **30**, 207–215.
- Mikulincer, M. (1998). Attachment working models and the sense of trust: An exploration of interaction goals and affect regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1209–1224.
- 中井大介・庄司一子 (2006). 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, **54**, 453–463.

- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, **47**, 248-258.
- 大野精一 (1997). 学校教育相談とは何か カウンセリング研究, **30**, 160-179.
- Pistole, M. (1993). Attachment relationships: Self-disclosure and trust. *Journal of Mental Health Counseling*, **15**, 94-106.
- Rempel, J. K., Holmes J. G., & Zanna M. P. (1985). Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 95-112.
- Rotter, J. B. (1967). A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, **35**, 651-665.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.
- 佐藤朗子 (1993). 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) **40**, 215-226.
- 杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成——関係性の観点からのとらえ直し—— 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 鋤柄増根 (2002). 研究法の理解とデータ分析における学生の誤解 教育心理学年報, **41**, 104-113.
- 高橋恵子 (1970). 依存性の発達の研究 III ——大学・高校生との比較における中学生女子の依存性—— 教育心理学研究, **18**, 65-75.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論から見た青年の対人態度——成人愛着スタイル尺度作成の試み—— 東京都立大学人文学報, 196号, 1-16.
- 山岸俊男 (1998). 信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム—— 東京大学出版会  
— 2006. 6. 13 受稿, 2006. 11. 13 受理—

## Trust for Teachers and Early Childhood Attachment in Junior High School Students

Daisuke NAKAI and Ichiko SHOJI

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15, No. 3, 323-334

The purpose of the present study was to investigate the relationship between trust for teachers and early childhood attachment in junior high school students. A total of 201 junior high school students completed a questionnaire that asked their attachment to parents and trust for teachers. We analyzed data separately for boys and girls, and found first for both sexes, secure and dependent attachment to parents had a positive correlation with trust for teachers, and insecure and avoidant attachment had a negative correlation. In addition, for girls, separation anxiety had a positive correlation with the trust. The results of this research showed that not only factors on the teacher side but also such psychological factors on the student side as attachment in early childhood were necessary to predict students' trust for teachers.

**Key words:** trust, teacher, junior high school students, attachment, parents